

筑波インターナショナルセンターの15年

地域と共にあゆむ国際センターを目指して

JICA LIBRARY



J1124306(0)

平成7年11月

国際協力事業団

筑波インターナショナルセンター



1124306 [0]

筑波インターナショナルセンターの15年

地域と共にあゆむ国際センターを目指して

発刊にあたって



国際協力事業団 筑波インターナショナルセンター
所長 森本 勝

筑波山を北に仰ぎ筑波研究学園都市の南部に位置する筑波インターナショナルセンター(TBIC)は昭和55(1980)年3月に誕生しました。

人口約18万人の筑波研究学園都市には、現在48の国の機関・研究所があり、日本国内の国立研究所の3分の1、全国の6割にあたる研究員が従事しています。さらに、民間研究機関など約250の機関が存在し、あわせて約1万2000人の研究員が先端技術などの研究に携わっています。このように、2700haの緑多き自然環境とともに非常に恵まれた「国際的科学都市」のなかで、当センターは15年の時を刻んできました。

国際協力事業団(JICA)は、国内に12の研修センター(北海道国際センターを含む)を附属機関として運営しており、それぞれ特徴がありますが、当センターは、上記の教育・試験研究機関などの多大の支援と協力を得ながら、研修は科学技術研究・開発の海外研修員が多く、集団研修コースの参加者も研究テーマにより研究室が異なる個別研修コース的研修をその特色としています。

技術革新と時代の要請の変化に伴い、研修コースの内容は年々改革されてきてはいますが、地震学や地震工学コースのように35年も継続してきた伝統的な研修コースもあります。最近では、環境地図セミナーや湖沼環境保全セミナーのような環境関連コースが脚光を浴びるようになってきています。

帰国研修員のアフターケアと新たな研修員のニーズを把握するために実施するフォローアップ調査団を海外に派遣してみると、当センターの帰国研修員がその国の試験研究機関の中心的メンバーとなっているケースも少なくありません。小職は時間の許す限り帰国直前の研修員と一人ひとり会って20~30分間面接をし、研修修了証書を手渡すことにしておりますが、うれしく思うのは、すでに述べましたとおり恵まれた環境のなかで研修期間を過ごし、日本と日本人に対する好印象と充実した研修の成果をおみやげに帰国する研修員が非常に多いことです。

このように着々と成果をあげてこられたのも、国・民間の各機関、大学ならびに茨城県をはじめとする地方自治体、NGOグループおよび地域の住民の方々の温かい協力の賜物であり、ここに深く感謝申し上げます。

開発途上国への人づくり・国づくり協力を通じ国際平和と親善を目的とする国際協力事業の一翼を担うべく、当センターは、地域に根ざした国民的広がりのある「国際センター」として、さらに脱皮して活躍できるよう努力と研鑽を続けてまいり所存であります。

ここに15年の歩みを取りまとめ、当センターの将来を展望し、なお一層発展させるために小誌を刊行することになりました。多数の方々からのご投稿とご協力に感謝致しますとともに、関係各位におかれましては、小誌を通じてさらにご理解を深めていただき、今後ともより一層のご指導とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。



ごあいさつ

国際協力事業団
総裁 藤田 公郎

国際協力事業団筑波インターナショナルセンター (TBIC) がここに設立15周年を迎えましたことは、筑波研究学園都市を中心とする国の機関、大学、および茨城県をはじめとする地方自治体、ならびに地域の民間の方々のご協力の賜物であり、深く感謝申し上げます。

筑波研究学園都市が東京一極集中を緩和し、首都全域の均衡のとれた発展と高水準の研究・教育拠点の形成をめざし、昭和43年より建設に着手され、国の試験・研究機関が筑波地区に移転されたことに伴い、昭和55年3月に当事業団8番目の国際協力センターとして本センターが設立されました。

筑波研究学園都市は、よく計画・整備された市街と、広くて近代的な研究所群からなる国際的科学都市として評価されていますが、主要道路から少しでも中に入ると豊かな田園風景が広がっています。当センターの周辺は、住宅等は増えつつあるものの、依然として静かなたたずまいの恵まれた自然環境のなかにあります。開設以来15年間で114カ国、5000名を越す研修員が本センターに滞在し、研究学園都市の試験・研究機関や、昭和56年に茨城県内原町から移転してきた当事業団筑波国際農業研修センター (TIATC) において、さまざまな研修に励んでまいりました。

研修員受入事業の目標は、専門的な知識や技術の移転を行うことにありますが、技術移転による交流を通して相互理解を深め、国際親善に貢献することも重要な目的のひとつです。このような観点から、筑波インターナショナルセンターに滞在する研修員の皆さんも、地方自治体の主催するお祭りやスポーツ大会、またNGOのメンバーの皆さんによるホームビジットや華道・茶道教室などへ積極的に参加し、地元の人たちとの親睦を深めています。帰国に際し提出される研修員の皆さんからの研修報告書の多くには、研修の成果とともに、これらの行事に参加した思い出が印象深く述べられています。

都心と45分で結ぶ常磐新線の建設も着手され、研究学園都市の拡充が推進されていますが、われわれの携わる国際協力も今大きな変化の時代を迎えており、国民的な広がりを持ちつつ、事業を展開することが求められています。このような状況において、本センターが途上国の人づくり、国づくりに一層貢献するとともに、茨城県下の国際交流促進にお役に立てるよう努力してまいりたい所存ですので、関係各位の一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。



設立15周年に寄せて

茨城県知事
橋本 昌

国際協力事業団(JICA)筑波インターナショナルセンター(TBIC)が、昭和55(1980)年3月に筑波研究学園都市に設立されてから15周年という記念の年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

わが国の開発途上国への経済協力は、近年、目覚ましい拡大を遂げてまいりましたが、そのなかでもJICAは、技術協力を主体に、途上国の発展に多大な貢献をされてまいりました。

貴センターはそのようなJICAのなかにあつて、これまで開発途上国から数多くの研修員を受け入れられ、専門的な知識や技術の伝授を通して、それぞれの国の社会や経済の発展を担う指導者の養成に尽力されてきたところであります。そして、そのことは日本のよき理解者を育成することにもつながってまいりました。

このようなわが国の国際協力の重要な一翼を担ってまいりました貴センター職員の皆様をはじめ関係者の方々のご尽力に対しましては、改めて深く敬意を表する次第であります。

筑波研究学園都市は、現在、250を超える研究・教育機関が立地し、まさに世界に誇る研究開発機能が集積した科学技術都市であります。貴センターでの研修を通じ、その多様な先端技術を研修員の皆様が修得され、世界のそれぞれの地域で役立てられておりますことは、筑波研究学園都市の建設に携わってまいりました県といたしましても大変誇りとするところであり、また、意義深いことと受けとめております。

今日、地球規模での国際協力がますます重要なものとなっておりますが、最近では地域においても国際社会への貢献が強く求められており、地域間相互の交流を基盤として、相手地域のニーズに合わせたきめ細かな国際協力が期待されております。

このような趨勢を踏まえ、本県では、今年の3月「茨城県国際化推進基本計画」を策定し、国際協力についてもJICAとの共同プロジェクトの実施や開発途上国への専門家の派遣など積極的な施策の展開を図ることとしております。

こうした事業の実施につきましては、JICAとも連携協力のもとに推進してまいりたいと考えておりますので、貴センターをはじめ、JICA関係者各位の一層のご理解、ご協力をお願いする次第です。

最後になりましたが、筑波インターナショナルセンターの今後ますますのご発展と職員の皆様方のご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



お祝いの言葉

つくば市長
木村 操

このたび、国際協力事業団(JICA)筑波インターナショナルセンター(TBIC)が設立15周年を迎え、ここに記念誌が発行されますことを心よりお祝い申し上げます。

かえりみますと、貴センターは国の研究機関や大学の協力のもとに、主として研究・教育をテーマとした研修を行うために昭和55(1980)年に設立されたものであります。

これは、国内最大の科学技術センター「頭脳都市つくば」としての期待と評価の高い筑波研究学園都市の特性を十分生かしたものであると思う次第であり、地元市長として大変光栄に思っております。

わが国は、戦後めざましい経済発展を示し、国際社会においても世界の先進国家の一員として歩み続けております。しかしながら、日本の経済発展は国際経済秩序に依存して成し遂げられたものであり、世界経済のために積極的に貢献することは、経済大国としての責務であると思っております。

そのような意味において、貴センターのもつ役割は大変大であると感じております。また、この15年の間に110の国から5000名にも及ぶ研修員の受入れを行ってきたことには、改めて感心するとともに国際社会の一員として世界経済に十分貢献してきたと言えるのではないかと感じております。

本市におきましても、海外の都市との姉妹都市交流事業をはじめとして、官民を問わず市内のいたるところで交流が行われており、若干ではありますが、国際社会での役割を担っているのではないかと感じております。

本市は平成4(1992)年に福祉都市宣言を行い、誰もが生きる喜びと明日への希望のもてる社会の建設をめざすとともに、人と環境に優しいまちづくりに努めております。また、都市形成の基盤となる常磐新線や首都圏中央連絡自動車道などの広域交通体系の確立をはじめとして、本地域を一変させる大きなプロジェクトが計画されており、首都圏の一翼を担う都市として期待されております。

貴センターにおかれましては、設立15周年のこの記念すべき年を契機に今後とも業務の充実・発展に努められ、ますます世界経済に貢献されますよう期待いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

設立15周年に寄せて



建設省 建築研究所
所長 三村 由夫

このたび、筑波インターナショナルセンター(TBIC)が設立15周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

貴センターは、国際協力事業団(JICA)の8番目の国際研修センターとして、昭和55(1980)年3月に世界的な研究開発機能の集積地である筑波研究学園都市に設立されました。爾来、開発途上国の「国づくり」の支援は、「人」を通しての技術協力、技術移転こそが基本であるとの認識に立ち、人と人との相互理解、ひいては国家間の相互理解を生み出す原動力となる人間関係の構築を重視しながら、社会・経済、あるいは技術の発展に貢献する優秀な人材の育成をめざして多くの事業を積極的に実施してこられました。

一言で技術協力、研修員受入事業と申しましても、そこには民族・宗教の違いや研修分野の異なる方々を受け入れているわけで、多くの難しい問題があると思います。そういうなかで、それぞれの研修員が十分な研修成果を得て、それを母国に持ち帰れるような環境づくりや、帰国した研修員に対するアフターケアなどさまざまな努力やそのためのノウハウが必要とされます。貴センターにおかれましては、豊富な経験をもち、業務に精通した方から意欲に燃えた若いスタッフなど優秀な人材を抱えるとともに、宿泊施設はもとより、セミナールームや体育館、テニスコートなどのレクリエーション施設などもよく整備・充実されるなど、研修員の方々に日本での快適な研修生活を提供できるよう意を注いでおられます。

改めてここに、貴センターが研修員受入事業にご尽力されてきたご努力に深く敬意を表する次第であります。

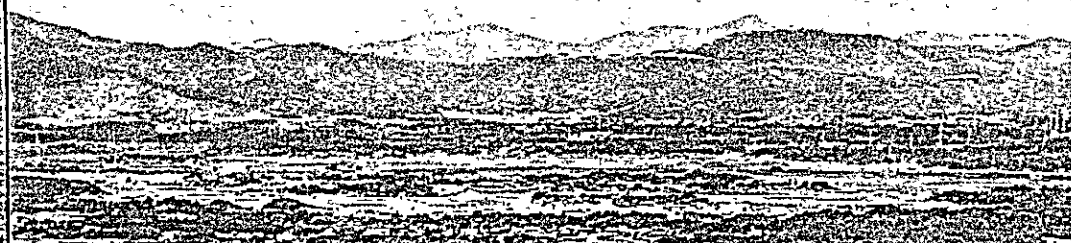
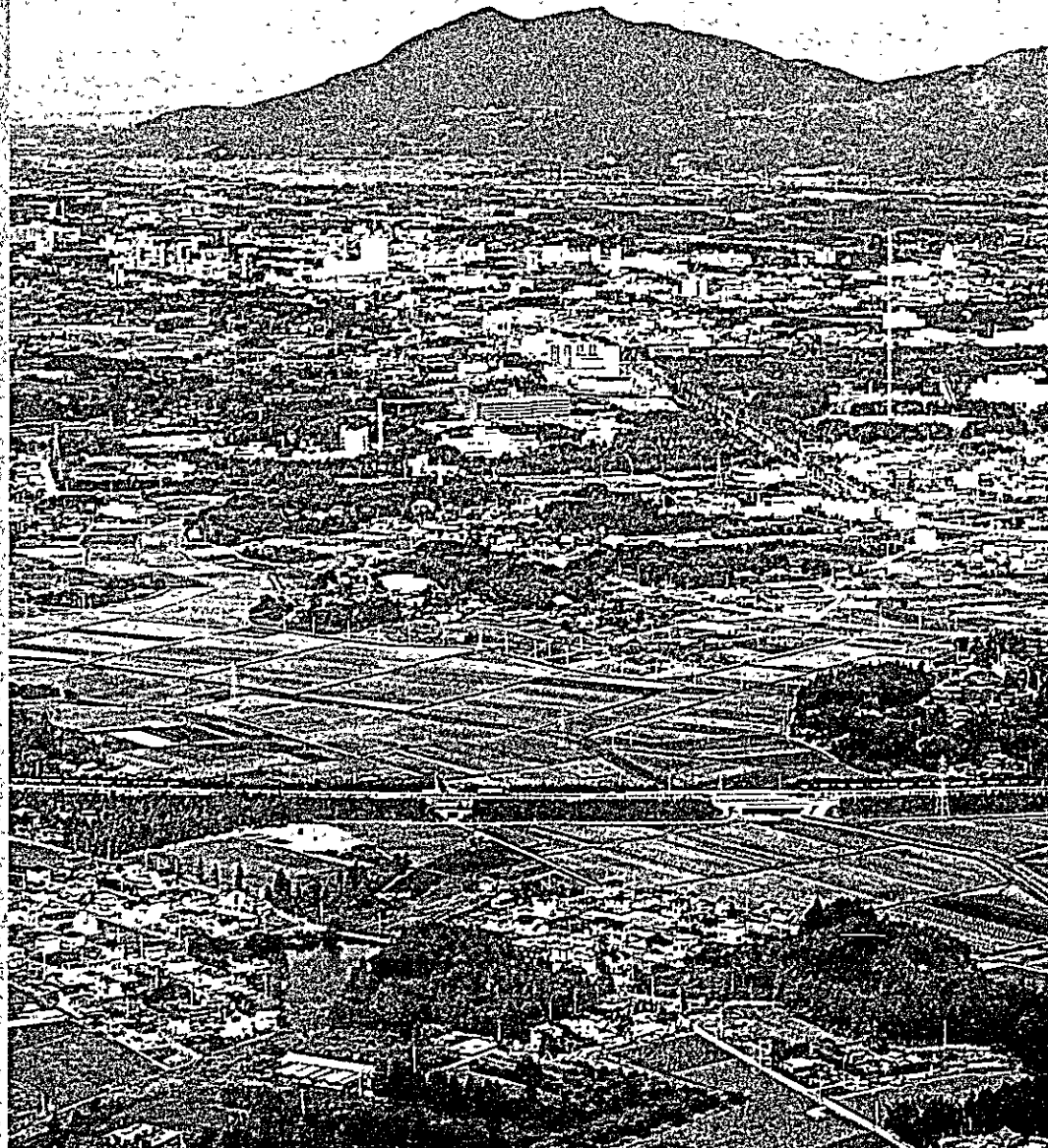
建築研究所におきましても、開発途上国からの要請に応え、地震学・地震工学およびそれらの関連分野における最新かつ高度な知識を修得させ、地震災害の軽減と防止に役立つ能力と判断力を養うための国際地震工学研修を、貴センターと緊密な連携のもと実施しており、送り出した研修員も本年で58カ国、898名に達しております。これら研修員の多くは、帰国後母国で重要な地位に就いて、それぞれの国で国づくりの中心となって活躍されており、所期の目的は達成されているところですが、今後ともこの研修を時代に即した形で一層の充実を図り、継続・発展させていくためにも、貴センターとの連携はますます重要なものとなっていくと思われまます。

最後になりましたが、JICAおよび貴センターのますますのご発展と、それによりわが国の国際貢献が一層充実することを祈念して、設立15周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

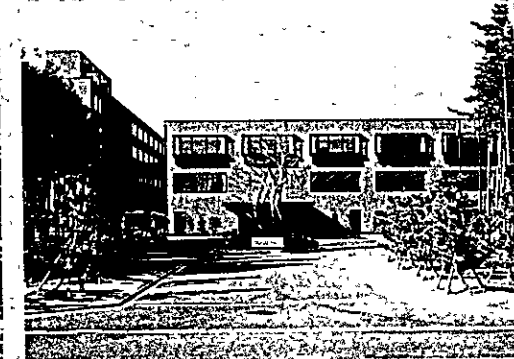
TSUKUBA INTERNATIONAL CENTRE

写真でつづる
TBIC

空から見たTBIC全景(手前中央)。後方に筑波山をのぞむ



TBIC前景(昭和56年)。まだ植え込みも新しい



平成7年。すっかり周囲に溶け込んでいる



TBICの活動を支える職員たち(平成7年5月現在)



正門前からTBICをのぞむ。昭和56年開所当時正面入口の車寄せ前に植えられたマツが、15年の歳月を経て大木になっているのわかる。

地域とともに15年



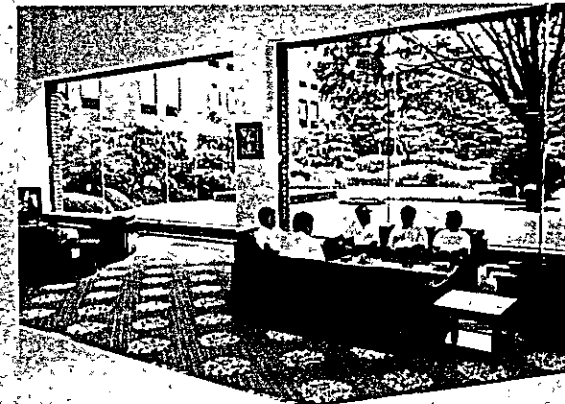
施設

快適な滞日のために、宿泊施設をはじめ医療室、体育館などを設置し、健康の面からも研修員をバックアップしている。



正面から建物をのぞむ

1階ホール



宿泊施設



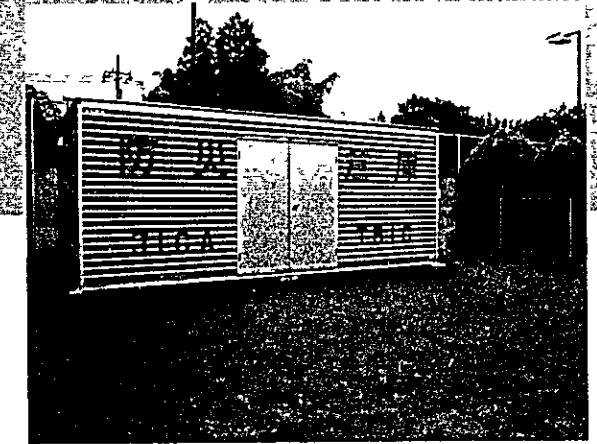
医療室



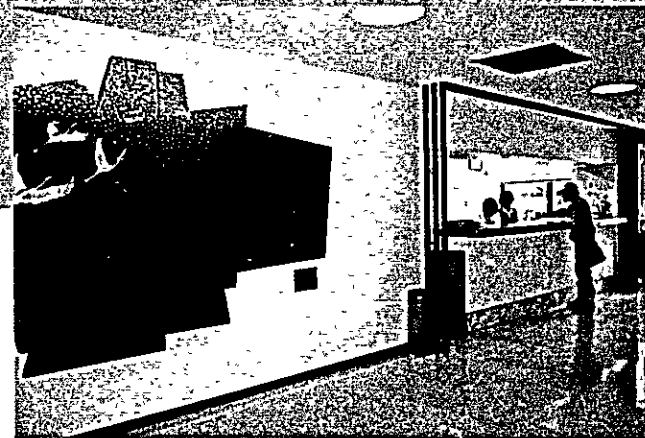
体育館



防災倉庫



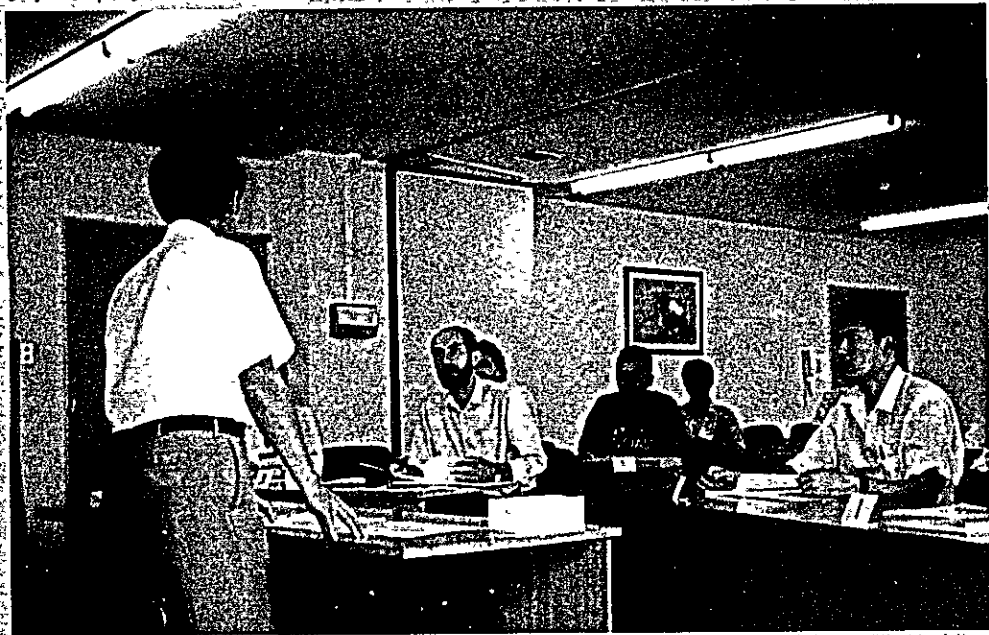
フロント



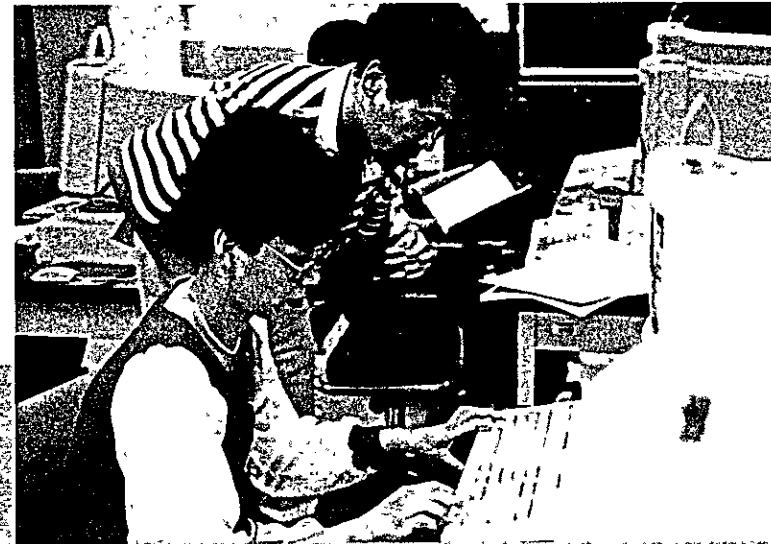
研修

研修プログラムはブリーフィング・オリエンテーションに始まり、技術(専門)研修、日本語研修、各種講座、福利厚生活動など、多岐にわたっている。いずれも受入機関、地域関係各位のご協力の賜物である。

ブリーフィング



テニス教室



コンピュータ講座

日本語研修



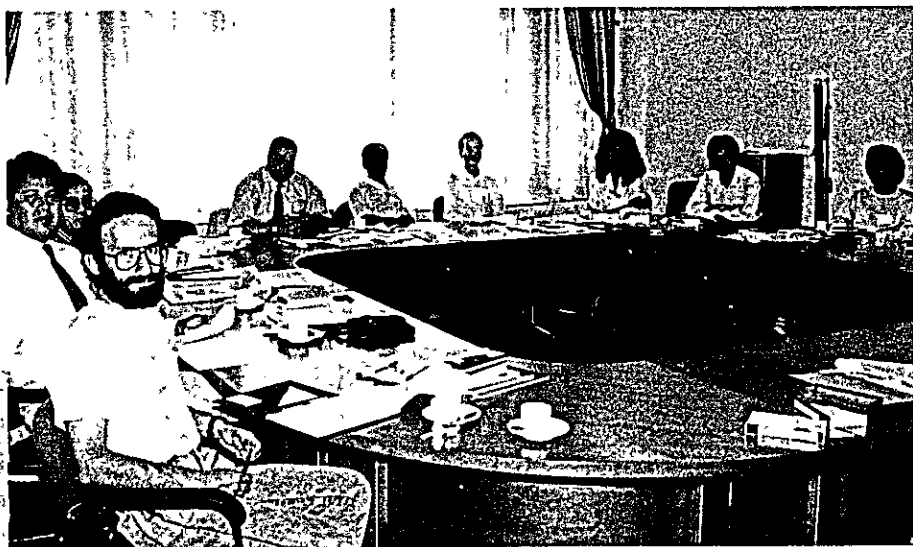
生花教室



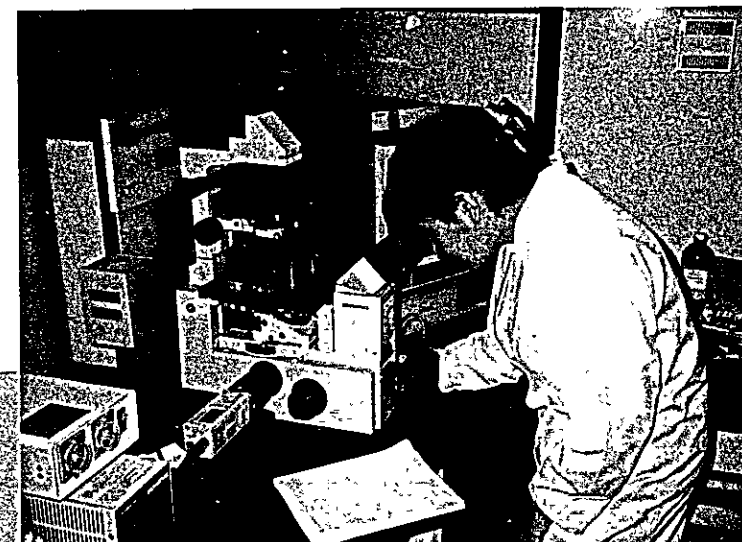
夏祭にも参加(七夕まつり)



会議室にて研修中
〔「自動車の安全・公害対策技術」平成4年5月〕



倒立顕微鏡で微生物を用いたバイオアッセイの結果を検討〔「化学技術研究」平成7年7月〕



二輪車の騒音実験〔「自動車の安全・公害対策技術」平成4年6月〕



歓迎パーティーでの集合写真〔「自動車の安全・公害対策技術」平成4年6月〕



広島研修旅行にて。神楽に招待されたお礼に研修員がギターを演奏
〔「計量標準」昭和59年7月〕

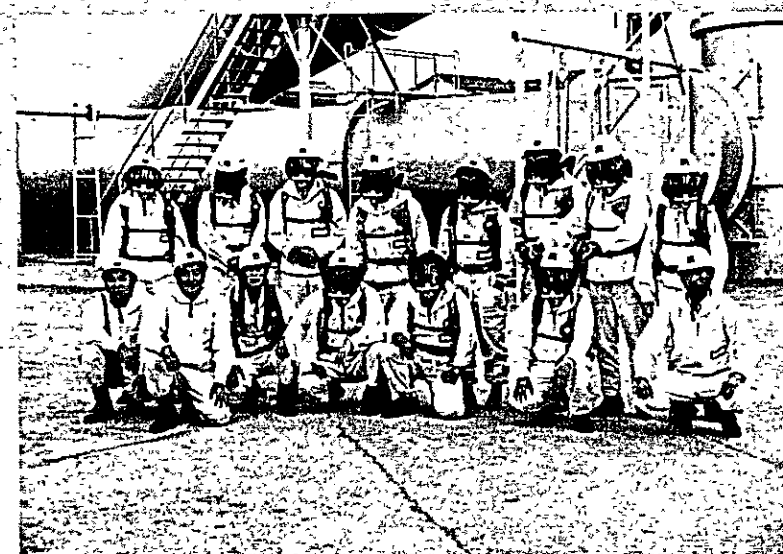
「人づくり、国づくり」—技術研修員受入事業はJICAが行う技術協力のなかでも最も基本的なものである。この研修で修得された技術は、各研修員の自国の社会や経済の発展に大きな役割を果たしている。



体積計校正の実習（「計量標準」昭和60年9月）



受入先訪問（「法定計量」平成5年9月）



鉱山救護訓練を終えて（「石炭鉱山保安」昭和57年3月）



受入先にて集合写真（「防災科学技術」平成6年9月）



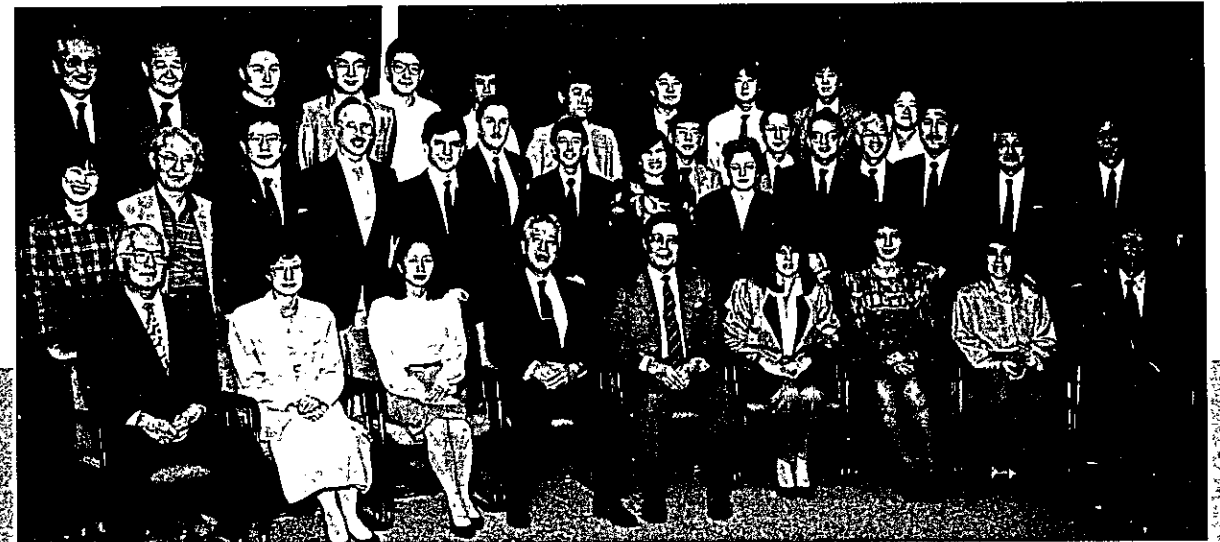
お茶の時間に招かれてくつろぐ
（「地震工学」昭和54年11月）



農家の婦人とともに（「植物遺伝資源」平成5年7月）



機械操作技術 (「測量技術」昭和63年10月)



受入先と集合写真 (「消化器癌病理学」平成元年11月)



農家にてヒアリング。生きた国際交流の見本 (「植物遺伝資源」平成5年7月)



日光研修旅行
(「測量技術」昭和63年10月)



北海道研修旅行
(「沿海鮎物資源探査」平成5年10月)

国際親善

パーティー

TBICでは、毎年、研修員と地域関係各位との親睦を図る「国際親善パーティー」を開催している。踊りや歌をはじめ国際色豊かな集いで、国際交流に大いに貢献している。



昭和56年



昭和61年

昭和63年



昭和55年



昭和56年



昭和57年



平成元年



平成2年



平成3年



平成4年



平成4年



平成4年



平成5年



平成6年
国際親善パーティー

